パラドックスの舞台

—『聖堂の殺人』試論—

平　野　順　雄

エリオットの詩劇 *Murder in the Cathedral*[1]は，Canterbury 大司教 Thomas Becket が1170年12月 2 日亡命先フランスから帰還し，殉教を遂げる12月29日までの27日間の魂のドラマを舞台にかける[2]。カンタベリーの女たちが歌う恐怖に満ちたコーラスに始まり，4種の誘惑との戦いを通してベケットが魂の浄化を行い，ヘンリーⅡ世の放った刺客の手にかかって死ぬプロセスが劇の中核をなす。

劇が終わる直前，ベケットを殺害した4人の騎士は，舞台前面に進み出てベケット殺しの弁明を行う。騎士たちの弁明は，国家の利益のためのやむを得ぬ行為としてベケット殺しを正当化する極めて論理的なものである。しかも，騎士たちは実名を明かし，明解な散文で大義を語るため，この場は，先行する儀式的[3]・神学的[4]韻文劇のアクション全体を相対化し，白日の光のもとに劇を見直す視座を観客に与えるかに見える。第4の騎士が説くごとく，ベケットの死を「狂人の自殺」だとする誘惑に観客はさらされるのである[5]。

自殺なのか殉教なのか観客にははっきりとはわからない，なぜなら自殺か殉教かを決めるベケットの魂のありようが劇化し得ない底のものであるから，とする批評家もいる[6]。つまり，観客は劇の焦点——「死と殉教に集中したかった」と後にエリオットは述懐する[7]——を尖鋭に意識させられながらも，劇全体の意味を与えられないまま置き去りにされる，というのである。

だが，まさにこれこそエリオットが意図した効果だった[8]。騎士たちの弁明が示す地上の論理と，弁明の場に先行する舞台を動かす神の論理とに観客を引き裂くことが，「観客への誘惑」の目的だったのである。

しかし，何故観客は二つの論理（paradox）に引き裂かれなければならないのか。また何故ベケットの死に立ち合うコーラスの女たちは錯乱し，ベケットは自殺とも見なしうる死に方をさせられるのだろうか。

これらの問いは『聖堂の殺人』が提出する殉教原理に直接関わっている。劇の提示する殉教原理そのものが，パラドックスとその解消を核にしているからである。

ベケットの死を自殺ではなく殉教にしたのは，舞台上でコーラスの女たちがパラドックスに引き裂かれたからであった。すなわち，ベケットがパラドックスを踏切板にして人間の論理から神の論理へ跳躍したことは，コーラスの女たちがベケットの「キリストのまねび」を見せられ，パラドックスに引き裂かれたことによって証明されたからなのである。

では，どのようなパラドックスがコーラスの女たちを引き裂き，ベケットの死を舞台上で殉教とするのかを，まず見なくてはならない。

I. コーラスの錯乱

「殺されることを予期した男が故国に帰って殺される」[9]だけのアクションにコーラスの女たちは無理やり立ち合わされる。ベケットの帰還を予知したコーラスの態度は，既に期待と忌避感との対立する感情を示している。ベケットの死が近づくにつれて，コーラスは初めに表明していた高い意識を失い，眼前の出来事に固着されたヒステリックな反応を示すが，ベケットの死がまだ遠くにある時の彼女たちは，ギリシャ劇のコロス[10]の如く舞台上で起こるアクションの意義を個人の感情を超えた深みで予示しさえする。

Since golden October declined into sombre November

And the apples were gathered and stored, and the land became brown

sharp points of death in a waste of water and mud,

The New Year waits, breathes, waits, whispers in darkness. (p.11)

・　・　・　・

Destiny waits in the hand of God, shaping the still unshapen:

I have seen these things in a shaft of sunlight.(p.12)

季節が秋から冬へ，実りから死へと移り，死の極点に「新しい年」が息づいている事と，超自然の神が運命を形造る事とを，劇冒頭のこのコーラスは重ね合わせ，自然と超自然の関係を的確に伝達し，劇全体の主調音を定める。上の2つの引用にはさまれた箇所でベケットの7年にわたる「不在」が歌われ，「人の子」キリストの誕生が再度待ち望まれるものとして "Shall the Son of Man be born again in the litter of scorn？"(p.12) と歌われてコーラスが終わりに近づく時，ベケットの帰還は「不在」と「再び」を仲立ちとして，「人の子」の再度の誕生と重ね合わされずにはいない。

コーラスは既に知っているのだ。「人の子の再度の誕生」とベケットの帰還とが等しいことを。更に，彼女たちがひきずられるようにして聖堂にやってきたのは，危険も安全をも超えたベケットの殉教(「人の子の再度の誕生」)を証する (witness) ためであることも。

There is no danger

For us, and there is no safety in the cathedral. Some presage of an act

Which our eyes are compelled to witness, has forced our feet

Towards the cathedral. We are forced to bear witness.(p.11)

だがしかし，コーラスの立ち場は動揺する。使者によってベケットの帰還が告げられると，コーラスはベケットに向けて "you come bringing death into Canterbury" と言い，フランスに帰れと叫ぶ。コーラスが感じとる恐怖は，彼女たちの理解を超えたもの，否，人間の理解を超えたものに直面する恐怖なのである。

A fear like birth and death, when we see birth and death alone

In a void apart. We

Are afraid in a fear which we cannot know, which we cannot face, which none understands(p.16)

コーラスは自らの役割を知りつつ，証すべき出来事に対する恐怖ゆえに「知」と「恐怖」によって既に引き裂かれている。彼女たちがベケットに "Leave us to perish in quiet"(p.15) と嘆願するのも出来事の重大さを知るが故なのである。

だからこそベケットは，コーラスの女たちを叱りつける僧に言う。女たちは自分たちの役割を「知っていて，かつ知らないのだ」と。

They know and do not know, what it is to act or suffer.

They know and do not know, that action is suffering...(p.17)

コーラスの役割は，徹底的に受身であることによって神のパタンを存続せしめることであり，コーラスにとっては「受苦」(suffering) こそが「行為」(action) なのだ，とベケットは言うのである。ベケットの科白は，コーラスが如何に "private terrors" を超えた "a great fear" に対して忌避感を持とうと，"presage of an act"(p.11) から逃れて静かに死滅していくことを神が許さないのだ，と言っているに等しい。ベケットは，自ら決意した殉教の証人にコーラスの女たちを強制的に仕立てようとするのだ。

以後，コーラスは舞台上で起こる出来事の「意義を感情の中に反映」させ(11)，出来事の「精神的次元を開示」する(12)。

ヘンリーⅡ世の放った4人の刺客がベケットを追い詰める時，コーラスは自らのアクションの徹底的受動性をあますところなく示す。

Am torn away, subdued, violated,

United to the spiritual flesh of nature,

Mastered by the animal powers of spirit,

Dominated by the lust of self-demolition,

By the final utter uttermost death of spirit,

By the final ecstasy of waste and shame(pp.42-43)

夥しい性的イメージは，コーラスの精神が犯される肉体であることを示してい

る。ベケット殉教の証人となることを忌避していたのは，この瞬間を恐れたがためだった。騎士たちのベケット殺しに立ち合うことで，コーラスの女たちが騎士たちと同一の精神的次元にいることが暴かれ，その事実が女たちにつきつけられる。“the spiritual flesh of nature” と “the animal powers of spirit” は，直接には騎士たち “death-bringers” の肉体と精神とを指すので，女たちは騎士たちに凌辱されたと歌っていることになる。だが，コーラスの絶望は，騎士たちに「結びつけられ」「屈服させられ」たことにとどまらない。彼女たちは “death of spirit” をもたらすあらゆる醜悪なもの——ふくろうの鱗じみた羽根，狂った鳥の声，海底の生物の腹わた，イソギンチャク，海綿の呼吸運動，魚のつるりとした胴など——と結ばれ，精神と肉体の区分など不可能な下等生物のぬらぬらした肉にまで存在の鎖を落下したのだ。「精神」が「肉」によって滅ぼされたのならば，「自己」を破壊することによってしかこの恥辱から逃れることはできない，とコーラスは錯乱した幻影の中で歌う。

しかし，彼女たちには破壊すべき「自己」はもはや残されてはいない。存在の鎖は，彼女たちを下等動物と結びつけるばかりでなく，地上の権力者たち，従ってベケット殺害の命を下した英国王ヘンリーⅡ世とも結びつけるからだ。

Rings of light coiling downwards, descending
To the horror of the ape. Have I not known, not known
What was coming to be? It was here, in the kitchen, in the passage,
In the mews in the barn in the byre in the market-place
In our veins our bowels our skulls as well
As well as in the plottings of potentates
As well as in the consultations of powers.
What is woven on the loom of fate
What is woven in the councils of princes
Is woven also in our veins, our brains,
Is woven like a pattern of living worms
In the guts of the women of Canterbury. (p.42)

コーラスは，神と聖者を除く世界全体と一体化したのである。彼女たちが「光の環」によって見たものは，超自然の支えを欠く自然に結ばれた彼女たちの「生」は精神の「死」に他ならないという恐怖のヴィジョンだったのだ。精神の「死」は「聖なるもの」との結びつきを断ち切る。肉としての世界そのものと化したコーラスに見えるものといえば，もはや「空虚」と「不在」と「神からの分離」でしかない。

だが，錯乱の瞬間はまた明視の瞬間でもあった。ベケットは言う。これがコーラスの女たちにリアリティが開示される瞬間なのであり，それゆえ "This is your share of the eternal burden,/ The perpetual glory."(p.43) なのだと。コーラスの苦しみが大きければ大きい程，神のパタンが完成された時の歓びは大きくなる，だから今の苦しみは栄光なのである，とベケットは言う。この「苦しみ」＝「栄光」のパラドックスは，キリストの受難と死を再演しているベケットにとっては，自らの殉教の正統性を証するものに他ならない。彼のクリスマスの説教中のパラドックス「悲嘆」＝「歓び」と「苦しみ」＝「栄光」のパラドックスとは，完全にパラレルをなすのである。

> Just as we rejoice and mourn at once, in the Birth and in the Passion of Our Lord; so also, in a smaller figure, we both rejoice and mourn in the death of martyrs. We mourn, for the sins of the world that has martyred them; we rejoice, that another soul is numbered among the Saints in Heaven, for the glory of God and for the salvation of men. (p.33)

そして死の瞬間が迫った今，ベケットはキリストの死と自らの死を「血」によって連結し，自分の死が殉教であることをもう一度確認する。刺客の騎士たちにベケットは言う。

> I am a priest,
> A Christian, saved by the blood of Christ.
> Ready to suffer with my blood.
> This is the sign of the Church always,
> The sign of blood. Blood for blood.(p.46)

しかし，コーラスにとっては，ベケットが帰国以来自分たちに強いてきたことは苦痛以外の何物でもなかった。ベケットの要求する証人としての役割ゆえに，彼女たちは引き裂かれ，騎士たちのみならずこの世の醜悪なるものの全体と一体化させられたのだ。今，騎士たちは剣を抜いてベケットを取り囲んでいる。恐ろしい思いをしてきたのは，このベケットのせいなのだ。ベケット殺害開始とともに歌われるコーラスは，騎士たちのベケット殺しを煽り立てるように聞こえるはずだ(13)。

CHORUS. Clear the air！ clean the sky！ wash the wind！ take stone from stone and wash them.
The land is foul, the water is foul, our beasts and ourselves defiled with blood. (p.47)

ベケットの「血」はコーラスには「汚れ」としか見えていない。ベケット自身を汚れの源だと思い込んでいるせいだ。世界全体がベケットの血を浴びて汚れたのだ。しかし，ベケット殺害が完了する時のコーラスはこう変っている。

Clear the air！ clean the sky！ wash the wind！ take the stone from the stone, take the skin from the arm, take the muscle from the bone, and wash them. Wash the stone, wash the bone, wash the brain, wash the soul, wash them wash them！(p.48)

ここでコーラスが「洗え！」と叫ぶ「皮膚」「筋肉」「骨」「脳」「魂」は，彼女たちや騎士のものであるとともにベケットのものでもある。コーラスは「汚れ」の源であるベケットの「血」によってベケットと一体化しているのだ。だから彼女たちも錯乱の中でベケットとともに死の国へ旅立ったのである。ただし，彼女たちが入って行った死の国は，ベケットのそれとは違って地獄だが。「血の雨」によって盲い，折ると「血の出る枝」の生えた死の国から帰還したコーラスはこう歌う。

But this, this is out of life, this is out of time,
An instant eternity of evil and wrong.(p.48)

ベケットが，「時の外でした決意」(It is out of time that my decision is taken,

p.46）を果たし，死によって今，この世の外へ出たように，コーラスも「時の外」へ出たのだ。それは「生」の外，すなわち死の国へだった。

ベケットが開口一番吐いた科白どおりに，コーラスの女たちにとって "action"（ベケット殺し）＝ "suffering"（自らの死）であったのだ。それゆえ，ベケット殺害は彼女たちにとって生涯残る一瞬，「一瞬の永遠」であり，この「一瞬」ゆえに彼女たちは「永遠」なる神とつながることができるのである。だから，ベケットの「血」は，彼女たちが思っているような「汚れ」ではなく，「祝福」だったのだ。

ベケットの死に立ち合うことが，コーラスを "knowing/not knowing" "action/suffering" "instant/eternity" パラドックスによって引き裂き，パラドックスの解消地点――超自然に支えられた自然――に彼女たちを導いたのである。ベケット自らが贖罪山羊として自らを差し出し，世界の罪の吸収装置になることによって，ベケットはコーラスの女たちが一体化した世界を浄化したのであった。キリストのエクタイプとしてのベケットの死を証するために，コーラスはパラドックスに引き裂かれ錯乱しなければならなかったのだ。錯乱を突き抜け，ベケットの「血」の意味を知った女たちは劇を閉じる最終コーラスを美しく歌いあげる。

We thank Thee for Thy mercies of blood, for Thy redemption by blood.
For the blood of Thy martyrs and saints
Shall enrich the earth, shall create the holy places.(p.53)

では，ベケットはコーラスをパラドックスによって一方的に引き裂くだけかというと，そうではない。最も深刻にパラドックスに引き裂かれるのはベケット自身なのである。それはベケットが第４の誘惑と戦い，長い沈黙に陥る時に起こる。

Ⅱ．ベケットの沈黙

教会権の上位に王権を置こうとするヘンリーⅡ世との抗争の果てに，殉教を決意してカンタベリーへ帰還したベケットを4人の誘惑者がおそう。第1第2第3の誘惑者は，それぞれ①王との仲睦まじい日々への回帰(快楽)②辞した大法官の地位に戻り王の下で地上の実権を握ること(権力)③王に反対する貴族と結託し王を打倒すること(利害)へとベケットを誘い，殉教の決意を覆そうとする。だが，ベケットは殉教を決意するまでにこれらの誘惑を乗り越えてしまっているので，これらは誘惑たり得ない。殉教者の栄光に比すれば地上の栄光など取るに足りない，とベケットは考えているからだ。しかし，誘惑者たちとの戦いを通して，ベケットに3種の誘惑を乗り越えさせたのは「高慢」であったことが明るみに出てくる。ベケットの神への帰依自体が「高慢」のなせるわざだったのである。僧1は言う。

His pride always feeding upon his own virtues,
Pride drawing sustenance from impartiality,
Pride drawing sustenance from generosity,
Loathing power given by temporal devolution,
Wishing subjection to God alone.(p.14)

ベケットの予期していなかった第4の誘惑者[14]はこの「高慢」を突く。誰よりも神の近くに座し，地上のあらゆる者に優るために殉教して聖者になれ，と誘惑者はベケットに言うのだ。

Seek the way of martyrdom, make yourself the lowest
On earth, to be high in heaven.
And see far off below you, where the gulf is fixed,
Your persecutors, in timeless torment,
Parched passion, beyond expiation. (p.27)

第4の誘惑者の言葉は，ベケットの心の奥の願いを顕在化させる[15]。「滅ぶ

ことなき冠」をわが物とし，彼を苦しめたヘンリーⅡ世一派を神の名において悲惨のどん底につき落とし，思いきり嘲ってやりたいという願いを。

殉教の決意そのものが「高慢」の結果だったのだ。ならば，誘惑者の言葉に従って殉教することは，偽りの殉教者になることでしかない。「高慢」ゆえの堕地獄がベケットの足もとで深淵の口をぱっくりとあける。絶望してこう叫んだ後，ベケットは長い沈黙に陥る。

Can sinful pride be driven out
Only by more sinful？ Can I neither act nor suffer
Without perdition？(p.27)

ベケットが沈黙する他ないのも当然なのだ。問いの形式自体が間違っているのだから。第1文は，「罪」である「高慢」を追い出す方法を「更に罪深くなること」に求めているが，「罪」の深化が「高慢」を超越する地点が明示されない以上，「更に罪深くなることによってしか罪深い高慢を追い出せないのか」という問い自体が意味をなさない。それに，仮により大きな罪によって「高慢」を追い出すことができたとしても，罪は深まるばかりではないか。劇状況に則して考えれば，「高慢」が原因で決意した殉教から「高慢」を追い出すために，更に罪深い偽りの殉教者になることに「高慢」からの脱出口を見出そうとしていることになるが，偽りの殉教者となることは，無論「高慢」以上の地獄堕ちを約束するばかりだ。

第2文。「行為」も「受苦」も私を地獄に落とさずにはいないのか，を劇状況にそって考えれば，“act”は「殉教者として行為する」の意であろうから，偽りの殉教をすることによる地獄堕ちを結果する。“act”と対立するものとしてとらえられている“suffer”は「殉教者として行為せず苦しみ続ける」の意となるから，「罪深い高慢のままとどまる」と同義になり，ベケットを地獄堕ちに導く。“suffer”が「死刑に処される。特に殉教者として」[16]の意であるとしても，現在のベケットにとって形だけの殉教を果たすことは偽りの殉教者となることであるから，やはり堕地獄でしかない。つまり，ベケットの苦悶の科白は，解答可能な問いになっていないのである。

しかし，問いが解答不能であることをベケットは誰よりもよく知っている。「高慢」を頼りに誘惑と戦うことが罪を深める結果に終わったこと，そして "act" が「作用を与える」の意であり，"suffer" は「作用を受ける」の意であって，[17]第2文が

I can do nothing
Without perdition.

の意味だったことも，ベケットには充分わかっている。だが，いかにしてこの袋小路から脱け出すか，その方法がわからない。だからこそベケットは沈黙するほかなかったのだ。

しかし，ベケットはこの袋小路からついに抜け出す。沈黙を破る第一声は晴れやかな澄み切ったものである。

THOMAS. Now is my way clear, now is the meaning plain:
Temptation shall not come in this kind again.
The last temptation is the greatest treason:
To do the right deed for the wrong reason. (p.30)

この歓ばしい科白はこう結ばれる。

I shall no longer act or suffer, to the sword's end.
Now my good Angel, whom God appoints
To be my guardian, hover over the swords' points.(p.31)

沈黙のうちにベケットは，"act" も "suffer" も必らず地獄堕ちを結果する存在それ自体の地獄から "act"/"suffer" の対立を超えた聖性へ飛躍したのだ。そして刺客の剣に取り囲まれるであろう自らの頭上に「天使」を見ている。何がこのような跳躍を可能にしたのであろうか。ベケットが沈黙に陥っている間の舞台を見なければならない。

ベケットが沈黙に陥る直前の苦悶の科白 "Can I neither act nor suffer/Without perdition？" に対して第4の誘惑者は，ベケットが舞台に登場して開口一番，コーラスの女たちに語った科白とほとんど同一の科白をベケットに投げつける[18]。

TEMPTER. You know and do not know, what it is to act or suffer.
You know and do not know, that action is suffering,
And suffering action. (p.27)

ベケットが土台とする "action" と "suffering" は別物だという考えを，誘惑者はあざ笑う。しかし，"action" も "suffering" も共に不可能なベケットにとって，"action" と "suffering" が同じになる世界があるとすれば，そここそベケットを堕地獄から救う世界であるはずだ。その世界とは？　誘惑者は続けて語る。

Neither does the agent suffer
Nor the patient act. But both are fixed
In an eternal action, an eternal patience
To which all must consent that it may be willed
And which all must suffer that they may will it,
That the pattern may subsist, that the wheel may turn and still
Be forever still. (pp.27-28)

"action"＝"suffering" が成立する世界は円環をなす永遠の世界である，と誘惑者は言う。「作用を与える」(action) 点を円環上に置き，その作用点を永遠に作用させ続ければ，ついに「作用」は「作用を与える」主体に戻り，「作用を与える」主体は「作用を受ける」(suffering) 客体と同化してしまう。逆も同様で，「作用を受ける」客体は「作用を与える」主体となる。また，円環としてとらえられた「永遠」を誘惑者は「車輪」として提示している。「車輪上の一点」＝「瞬間」は回転するが，瞬間の無限総和である「永遠」＝「車輪全体」は形を変えず，総体としては「静止」する。かくして "turning"＝"stillness" となる。

永遠・無限において対立が一致するとするニコラウス・クザーヌスばりのパラドックスとその解消[19]を，何故誘惑者がベケットに投げつけるのかといえば，勿論ベケットの苦悩を深めるためだ。コーラスの女たちを強制的に殉教の証人に仕立てるために語った言葉をそのまま投げつけられること程，殉教の決意が堕地獄への道でしかないと知った今のベケットにとって苦痛なことは他に

ないからだ。誘惑者の言葉は，その先には狂気しかない論理の袋小路の極限までベケットを追い詰めるはずなのである。確かにベケットは女たちを叱りつける僧に対してコーラスの女たちのことをこう言っていた。

THOMAS. Peace. And let them be, in their exaltation.

They speak better than they know, and beyond your understanding.

They know and do not know, what it is to act or suffer.

They know and do not know, that action is suffering

And suffering is action. (p.17)

自ら語った言葉を誘惑者に投げつけられて，ベケットは一瞬，コーラスの女たちと同じ立場に身を置く。この時，ベケットは誘惑者を通して自らの言葉と対峙させられずにはいない。知っていたはずの自らの言葉の意味を知らない者としてベケットは沈黙し，言葉と向き合っているのだ。この間に交わされる4人の誘惑者とコーラスのかけ合いのうちに，コーラスは誘惑者たちの体現する地獄の腐臭が室内へ，そして彼女たちの肉体の中へと侵入してくる事におびえ，ベケットにこう嘆願する。

O Thomas Archbishop, save us, save yourself that we may be saved;

Destroy yourself and we are destroyed. (p.30)

コーラスの絶叫は，ベケットと彼女たちが誘惑者 "The Lords of Hell" に対する運命共同体であることをベケットに知らせる。自ら語った言葉の意味を握むことが，今やベケットにとって自らを救い，コーラスの女たちを救う唯一の道となるのである。

ベケットがコーラスに対して "knowing" = "not knowing", "action" = "suffering", "turning" = "stillness" の科白を吐いた時，ベケットは車輪の中心に自らがいて，輪上にコーラスの女たちがいると考えていた。しかし，第4の誘惑とコーラスの悲鳴によって，ベケットは車輪の中心にいるのは神であり，自分は輪上にいることを今知らされたのである。ならば，ベケットに要請されることは，かって彼がコーラスに要求したこと，即ち "knowing/not knowing" "action/suffering" "turning/stillness" のパラドックスに引き裂かれることに

よって「聖なるもの」の存在証明を行なうことなのであった。それはベケットにパラドックスの等号そのものになることを要求する。対立を等号に変える世界への跳躍は，自らの肉体をパラドックスの解消場とすること，即ちロゴス化された肉体の構成を必須の条件とするのである。ベケットは自ら語った言葉そのものにならなければならない。ベケットが理解した「意味」とは，この一事に他ならない。今，ベケットは晴れやかに語り出す，“Now is my way clear, now is the meaning plain” と。

ベケットが沈黙に陥る直前の絶叫

Can sinful pride be driven out

Only by more sinful？ Can I neither act nor suffer

Without perdition？(p.27)

の第1文の問いそれ自体が “pride” と “sin” の棄却を要請していた。第2文の “act” も “suffer” も不能，は “action”＝“suffering” となる地点，すなわち人間の条件を超える地点への跳躍を要求していたのである。「高慢」を脱却するためには自己へのこだわりを棄てねばならなかったように，人間の条件を超えるためには「主体」‘I’ の空無化が求められていたのであった。間違っていると見えたベケットの問いの形式は正しかったのである。

ベケットが偽りの殉教者から真の殉教者に変貌するこの第1部と実際に殉教を遂げる第2部との幕間で行なわれるクリスマスの説教で，ベケットは殉教の論理を語る。殉教者とは「神の意志」の中に自己を失なうことによって「平安」を得た「神の道具」のことであり，キリストの受難と死を小さな規模で「再-演」(re-enact) する者の謂である，と。

第2部でベケットを殺しに来た4人の騎士の剣がベケットを取り囲み，剣が車輪のスポークの形をとる時，舞台は車輪の中心(神の位置)にベケットがいることを視覚化する[20]。この場はまた，ベケットが “knowing”＝“not knowing” “action”＝“suffering” “turning”＝“stillness” パラドックスの等号そのものになったことをもはっきりと示すのである。

従ってベケット沈黙の場は，余りにも人間的であったベケットの殉教の論理

が，パラドックスとその超克を通してのみ表現可能な神の論理(ロゴス)によって打砕かれる場なのである。沈黙のうちにベケットは，主体 'I' の空無化によってロゴス的肉体を構成し，人間の論理から神の論理への跳躍を果たしたのであった。すなわちベケットの沈黙の間は，主体を棄却することによって神の意志の中に新しい自らを見出すキリスト教パラドックスの肉体化の間だったのである。

Ⅲ．殉教の原理

人間の論理（words）を引き裂く神の論理（Word・ロゴス)はパラドックスとして現われ，ベケットそしてコーラスの女たちを引き裂いた。引き裂かれた者たちは「死」によって別の世界へ入って行った。肉体をロゴス化したベケットは超自然の世界へ，そして精神を肉体化されたコーラスは超自然によって祝福された自然的世界へ。この２つの事柄の焦点は，贖罪山羊としてのベケット殺しの場であった。

この場面は，各部冒頭のコーラスで歌われる「殉教者の誕生」＝「キリストの再度の誕生」のテーマ，クリスマスの説教におけるキリストの誕生・受難・死の再演としてのミサの意義の確認，ベケット殉教の日に行なわれる聖人の祝日の顕揚に続き，劇の儀式性の頂点をなすが，それだけではない。

というのは，この場は贖罪山羊としてのベケット殺しによってベケットを聖化し世界を浄化するという祭儀の舞台化であると同時に，超自然の神の論理へ跳躍する者は主体 'I' を精神において空無化するだけでなく，肉体そのものをも空無に帰さねばならないことを恐ろしいまでに明瞭に示すからである。人間の論理を砕く神の論理によって生じるパラドックスの解消場となることは，ベケットが第４の誘惑との戦いの過程で行なった自らの言葉の受肉のみならず，ロゴス化された肉体としてロゴスの中に吸収し尽されることをも意味したのである。まさに殉教とは，徹頭徹尾「キリストのまねび」であったのだ。

Ⅳ. パラドックスの劇場

こうしてベケットが完全にキリストのまねびを果たし主体を空無に帰せしめた時，刺客の騎士が行なう「観客への誘惑」は付け足しではない。騎士たちが「殉教」を「自殺」に見せようとすることは，ベケットの舞台上でのアクション——人間の論理（words）を超克し神の論理（Word）に近づくことによる主体'I'の文字どおりの消失——と全く逆方向の論理によってベケットの死を無意味化することだからである。

だがしかし，コーラスがパラドックスに引き裂かれることによってまぎれもなく殉教として提示されたベケットの死が，真に殉教であるか否かは誰にも見ることのできないベケット心内の舞台で起こった出来事が決定したのではなかったか。だからベケットの死が「殉教」なのか「自殺」なのかは，観客一人一人の心内の舞台で劇全体を「再-演」することによって決定されなければならないのである。

騎士たちの弁明は観客を地上の論理と神の論理によって引き裂き，劇場全体をパラドックスの宇宙に転じる仕掛けだったのである。劇場を出た観客の耳に劇全体の意味がおぼろげな余韻となって残り，こういう問いの形をとれば，劇場の外の世界全体がパラドックスの劇場(聖と俗の戦場)と化するに違いない。

"Are you ready to be torn by divine paradox？"

注

(1) テキストは T. S. Eliot, *Collected Plays* (London: Faber and Faber, 1962) を用いる。

(2) ベケットの死は国王ヘンリーⅡ世との抗争の結果である。腹心の大法官ベケットをカンタベリー大司教に任ずることによって，教会権を王権の下に置こうとしたヘンリーの期待を裏切ってベケットは大司教になるや大

法官の職を辞し，教会権の頑強な擁護者となる。以後，ヘンリー対ベケットの抗争は和解を見ず，ついにヘンリーは下臣にベケット殺しを命ずる。こういった事の顛末ゆえに，ベケットを舞台にのせた劇作家たち——テニソン（Alfred Tennyson, *Becket*, 1893），アヌイ（Jean Anouilh, *Becket ou l'honneur de dieu*, 1959），フライ（Christopher Fry, *Curtmantle*, 1961）——は，劇の焦点をどこに定めるにせよ，ヘンリー対ベケットの抗争をリアルに描くことを自らに課した。そのためには，少くとも抗争の発端となるベケットの大法官辞任とそれ以後の経過が劇プロットに組み込まれねばならなかった。

(3) 『聖堂の殺人』の儀式的要素については多くの指摘がある。例えばGrover Smith, *T.S. Eliot's Poetry and Plays*（Chicago U.P., 1956）pp.186-187; D.E. Jones, *The Plays of T.S. Eliot*（London: Routledge and Kegan Paul, 1960）pp.53-54; David Ward, *T.S. Eliot: Between Two Worlds*（London: Routledge and Kegan Paul, 1973）pp.182-184; Carol H. Smith, *T.S. Eliot's Dramatic Theory and Practice*（New York: Gordian Press, 1977）pp.104-109.

(4) 『聖堂の殺人』を神学劇と見たものにFrancis Fergusson, *The Idea of a Theatre*（Princeton: Princeton U.P., 1949）がある。特にp.211参照。

(5) D.E. Jonesは，この場を "the temptation of audience" と呼ぶ。D.E. Jones, *The Plays of T.S. Eliot*, p.61.

(6) Hugh Kenner, *The Invisible Poet: T.S. Eliot*（London: Methuen, 1960）pp.239-241. 無論Kennerは，この劇の焦点を "the purification of Becket's will" と正しくとらえた上で，劇の弱点として述べている。

(7) T.S. Eliot, "Poetry and Drama" in: T.S. Eliot, *On Poetry and Poets*（London: Faber and Faber, 1957）p.81

(8) *Loc. cit.*「『聖ジョーン』の影響をうけていたかもしれない。私は観客にショックを与えたかった」とエリオットは言う。Bernard Shaw, *Saint Joan*（1924）も劇のエピローグに死んだジョーンをよみがえらせ，1920年

代とジョーンの時代とを相対的に描き出すとともに，現代において聖性が如何なる意味を持ちうるのかという悲痛な問いで劇を閉じることによって，劇をオープン・エンドにしている。

(9) *Ibid.*, p.80，『聖堂の殺人』の劇アクションが本質的に限定されたものであるために，コーラスが劇の弱点を補強するのに大変役立った，とエリオットは言う。

(10) Aeschylus 劇のコーラスに『聖堂の殺人』のコーラスはならっている，と D.E. Jones は言う。D.E. Jones, *The Plays of T.S. Eliot*, pp.51-52.

(11) T.S. Eliot, "Poetry and Drama" in: *On Poetry and Poets*, p.81.

(12) D.E. Jones, *The Plays of T.S. Eliot*, p.51.

(13) Michael Goldman, "Fear in the Way: The Design of Eliot's Drama" in: A. Walton Litz ed., *Eliot in His Time* (Princeton: Princeton U.P., 1973)p.178.

(14) 第 4 の誘惑者にベケットは言う。"Who are you？ I expected/Three visitors, not four,"(p.24).

(15) 第 4 の誘惑者にベケットは問う。"Who are you, tempting with my own desires？"(p.27)

(16) suffer: 9. To undergo the extreme penalty; to be put to death, be executed. Now *rare* in literary use except of martyrdom. (O.E.D.)

(17) act: 10b. To act *on* : To exert influence on; to influence, affect. suffer: 4 . To be the object of an action, be acted upon, be passive. (O.E.D.)

(18) 誘惑者の科白には，ベケットがコーラスの女たちについて語った科白中の重要な一句 "for the pattern is the action/And suffering" が欠如しているため，誘惑者の "pattern" は神なき "pattern" となる。従って誘惑者の "wheel" には中心が無い，と Martin Browne は考える (E. Martin Browne, *The Making of T.S. Eliot's Plays*, Cambridge: Cambridge U.P., 1969, pp.75-76)。しかし，問題の一句の "pattern" が "God's pattern" に見えるのは，ベケットが語るからに他ならないのではないかと思われる。

(19) あらゆる対立を一致させるものとしての神概念を，クザーヌスは論理を解

体させる超論理によって数学的に証明しようとする。cf. Nicolas Cusanus, *Of Learned Ignorance* trans. Germain Heron (London: Routledge and Kegan Paul, 1954)。パラドックスによってしか超自然の神を表現しえないとする考えについては，Rosalie L. Colie, *Paradoxia Epidemica: The Renaissance Tradition of Paradox* (Princeton: Princeton U.P., 1966) p.24 参照。

(20) Nevill Coghill はこの場面の儀式性を強調する。*T.S. Eliot, Murder in the Cathedral: With an Introduction and Notes by Nevill Coghill* (London: Faber and Faber, 1965) p.133.